

「全国ハトムギ生産技術協議会」は、新興産地としてハトムギの作付が伸びてきた富山県関係者が中心となり、全国産地の栽培技術を高めることを目的に平成19年に準備的な会合がもたれ、20年4月に主要な産地の生産者・技術指導・実需・研究等関係者が参画し発足した。（詳細については、「特産種苗」No 3、p10を参照）入会や協議会活動への参加は、本会の活動に賛同する者であれば自由で、ハトムギに熱意を持つ人々の集まりである。

設立の趣旨で、「国産ハトムギの振興と栽培技術の向上を図るため生産者や指導機関、研究機関等の関係者が集い、産地間の連携や技術交流等の自主活動を行う。」とされ、目的達成のため夏期現地研修会や秋期検討会を開催されている。

今年の夏期研修会が、鳥根県下で7月30、31日の1泊2日の日程で行われたので参加させていただいた。参加者は、県外より84名、県内より81名の総数160名余、参加者は、育種・栽培等研究者、行政・普及担当者、JA関係者、生産者、加工等実需者、農機具メーカー等々、それぞれの現場でハトムギに取り組まれている多彩な多くの関係者が集まった。

1日目は、ハトムギが導入されて4年目という新興産地、斐川町での現地視察が4台のバスに分乗して行われた。20年産の作付面積40haが本年は100haを超え、地域の指導者が急激な作付拡大にとまどいもあるとの感想も聞かれたが、品種比較展示ほ場、密植栽培展示ほ場の設置等地域に適した品種選抜・栽培技術確立に向けた取組が積極的に進められ、斐川町の農業の指導推進の母体である「斐川町農林事務局」からは、「ハトムギ栽培マニュアル」も示されている。また、大型機械、乾燥調整貯蔵施設の整備・導入等もJAが中心になされており、ハトムギ栽培の支援基盤整備も進み産地体制は確立されてきているように感じた。

今年のハトムギの生育状況は、会議当日まだ梅雨明けになっていなかったことに象徴されるとおり、天候不順による播種の遅れ、中耕除草等の管理作業の遅れ等々が重なり、生育の遅延、雑草の繁茂等生産者の心労が聞こえるようであった。密植・品種系統比較展示ほ場、施設等の現地では、それぞれの担当者・専門家から紹介・説明が成されたが、全国それぞれの特性を持った産地の生産者を含めた関係者とあって、説明を聞き、自分の目で確認し、自産地の状況との比較、これまでの経験等を踏まえた議論が随所で聞かれた。その内容は、肯定的意見から懐疑的な意見まで、それぞれの産地の栽培経過、栽培環境、栽培の歴史等を感じる議論であった。

2日目は、松江市内のホテル内の会議室で、講演会と検討会が開かれた。

まず、1日目の現地検討会の現地JA斐川町より取組状況の説明がなされ、天井川となっている斐伊川両岸から宍道湖畔に広がるほぼ100%基盤整備済の大区画水田ほ場でのハトムギ栽培導入の経緯と、産地整備の経過等が説明された。転作作物としての選定、大区画ほ場での大型機械化栽培体系の導入、その一環としての密植栽培技術の検討、品種選定、生産物の乾燥・調整のための施設整備、生産物の安定消費・高付加価値等々のための製品開発等、ハトムギ導入とこれまでの取組が紹介された。平成21年産の作付面積は最終的な目標面積に近いとのことで、今後は、技術の高度化・平準化がなされ「ハトムギ」が斐川町農業の重要作物の1つの「柱」として定着することが期待されていることを感じた。

講演会では、ハトムギ関連製品の加工・販売を実際に行われている業者担当者より、ハトムギ加工品のこれまでの取組状況、今後への期待、そのために必要な事等について話された。

岡山県の半鐘屋の岡田氏は、ハトムギとの出会い、健康食品市場の動向、開発・販路拡大の方向についてハトムギへの熱い思いを込めたお話があり、鳥取県の(株)ゼンヤクノーの森下氏からは、ハトムギ加工の色々な現物例示しながらの加工事例紹介や、農業と薬業の一体化等、興味深いお話がなされた。何れにせよ、生産の安定には、販路の確保と生産に取り組める価格が必要であり、加工流通業者にとっても原料確保と原料価格の安定が同じように重要であり、生産現場と加工流通現場の連携が産地の形成・維持発展に重要であることを改めて感じた。

最後に、総合討論の場が持たれた。その主たる議論は、ハトムギの「農業災害補償制度」への加入ができないかであった。ハトムギは作物特性として脱粒が起こりやすく、特に収穫期が台風時期と重なることから収穫皆無の状況も多く、生産の継続性のためには「共済制度」への期待が高いことから、研究会として今後どう取り組むか議論された。しかし、現時点においてはその前提となる収量、被害査定等のデータ蓄積がなければ難しいとの現状について共済関係者より説明があり、国からは状況報告の要請がなされているとの報告があった。

最後に、手塚会長(九州農研センター)より締め括りの挨拶があり終了した。

なお、1日目の夜は宿泊先のホテルで懇親会が催され、斐川町で生産されたコシヒカリ米粉とひまわり油を使ったうどんも供され、ざっくばらんなハトムギ談義に花が咲き、全国のハトムギ関係者の交流の輪が広がった。

1つのマイナーな作物について、1つの産地からの声を全国の産地に広げ、手作りの協議会が組織され、盛大に研修会・検討会まで開催されることは希有な事例ではないかと思う。一般的に、地域特産農作物は栽培地域に限られ、その地域に隔離され、産地間の連携は希薄であり、従って、全

国的な協議会等の設置は言うに及ばず、産地間で技術をさらけ出すような交流が持たれること等は難しいのが現状ではないだろうか。ハトムギを地域特産農作物と呼ぶか否かは議論があると思うが、全国的な面積、今後の見込等考えれば「特産農作物」とは言えるかも知れないし、北から南まで栽培されることを考えれば「地域特産農作物」とは多少趣が違っても知れない。ハトムギが一時期転作作物として脚光を浴び、国の育種作物の対象となっていることも1つの要因かも知れない。しかし、昨今の機能性食品、健康食品ブームと輸入食品がもたらした安心安全な国産食糧供給への消費者指向の高まりの中で、ハトムギの需要も国産指向が高まってきている現状を踏まえれば、時期を得た関係者の動きであったとおもわれ、協議会をバネに堅実に産地強化が図られればと思う。

今後は、地域特産農作物にあっても同じ作物、あるいは特異的な特産農作物を生産する産地が、それぞれが持つ技術、経験を持ち寄り議論することは、これからの時代には必要なことかと思われる。要は、特産物の拡散を恐れ閉じこもるのではなく、積極的に外からの技術、意見を取り込み技術の高度化、品質向上等産地の活性化・強化を図ることが、より特産農作物の生産確保と産地発展につながるのではないかと感じた。そのためには、それぞれの地域に、その作物や地域の農業に情熱を持った生産者、指導者の存在が不可欠ではないのか。参集されたハトムギ産地には、その下地が有ったと言えるのではないかと思う。

11月には、今年の生産状況を踏まえた「秋期検討会」(勉強会)を開催する予定と会議の最後に連絡された。栽培生育時期に生産現場を見ながら現地研修会、収穫後にその年の生産を踏まえた勉強会を開く、この仕組みもまた関係者の熱意として感ずる点である。今後のハトムギ生産と産地の発展を期待したい。

(上野幸一)